

マタイ福音書には、処刑されたイエスの墓を見張る番兵の記述がある。復活の噂で民衆が扇動されないようにという備えだが(マタイ 27:64)、復活の報告を聞いてもそれを虚偽にした(28:11~13)。

何としてでもキリストの働きを抑えようとする世の力があり、そのような中に復活は起こった。

イエスが十字架で死んだ翌々日、日曜日の明け方に二人のマリアは墓へ行った(28:1)。どうにか死を心に納め、落ち着きたかったのか。彼女らはイエスの「死」を見に行った。

そして墓で天使から「あの方は、ここにはおられない~復活なさったのだ(28:6)」と告げられる。強面の番兵ですら、天使に遭うと驚愕して顔面蒼白になる(28:4)。だから天使は、女たちにまず「恐れるな(28:5)」と釘を刺す。

天使の「恐れるな」という言葉、聞き憶えがあるだろう。そうだ、降誕の折だ。

養父となるヨセフに(1:20)、母となるマリアに(ルカ 1:30)、降誕した御子を見に行く羊飼いらに(2:10)、天使は「恐れるな」と告げ、各々が果たすべき役割を与えた。

そのために、常識とか、教えとか、理解とか、自分の範囲とかの、あらかじめ持っている枠組みが壊される。二人のマリアの枠も、ぐずぐずっと崩された。

マリアらの何が崩されたのか。「イエスの死」が、だ。死を納得し、悲しみで現状を受け入れようとしていたが、二人のそうした構えは天使の「復活告知」によって壊された。

すると「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った(28:8)」。

「恐れながらも喜び」とは興味深い表現。心の底部に起こった不可解と言えようか、女たちの柔軟な混在感覚と言えようか。事情が明快でないまま急いで墓(死)を立ち去り、新しい「命」の可能性へ走った。

するとどうだろう。復活のイエスが現れて、いつものように挨拶するではないか(28:9)。そして女たちに混在していた懐疑や恐怖を、「恐れるな」という言葉で取り除き(28:10)、天使の言葉(28:7)をくり返して前に押し出した(28:10)。復活の報告は火急、ひれ伏している場合ではないらしい(28:9)。

ローマ帝国という強大な力(十字架)をもってしても、厳粛な信仰権威をもってしても、抑え込むことのできない復活。イエスの復活は、人間にはどうしようもない「死」さえも超えて、私たちのただ中に起こる。そして私たちは、その復活の命に与る。

十字架の死を、信仰によって見つめる者は、「恐れるな」という言葉を聞くだろう。そしてそこで、神の命にむかう驚くべき逆転が起こる。

「主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ、墓穴に降ることを免れさせ、わたしに命を得させてくださった(詩編 30:4)」。

キリスト以前にも、「死」を超える神の御手によって、朽ちる人間に神の命が与えられることはあった。そして今、強大な悪の徴(十字架)をも逆転させて、私たちの現実に復活が到来している。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(ヨハネ 3:16)」。

それほどに愛される世でありながら、戦争や圧迫、貪りや環境破壊は止まない。しかし神の愛が勝るゆえに、そこでキリストは復活する。



《おまけのひとつ》

復活は光 光は闇を露わにする 世の罪と憎悪が 復活によって 奥の奥まで明らかにされる
復活は命 命は死を超えていく 元来 命は死と等価だが キリストの命で私は死を超えていく